

歴史を語る建物たち

第15回

今日、20世紀型の開発優先社会は終息を迎え、文化、景観、観光などの側面から歴史的建造物が見直されるようになってきた。平成8年の登録有形文化財制度の発足などは、その象徴である。しかし、一方で、文化財指定を受けていないがその価値は十分にある古い建物が、道路の拡幅などで無造作に壊されていく現状もある。本シリーズでは、文化財指定を受けた有名建造物から、街中にひっそりとたたずむ建物まで幅広くスポットを当て、それらの歴史的経緯やエピソードなどを紹介する。

日本料理「千歳館」(山形市)



山形市の中心部にほど近い、「花小路」と呼ばれる繁華街の一角に、木々に囲まれた洋館風の建物が建っている。

大正4年に建築された日本料理「千歳館」である。

山形県知事が命名

明治9年初春、山形市内で代々魚問屋の五十集屋を営んできた初代澤渡吉兵衛が、両羽銀行(現在の山形銀行)本店の裏通りにあった料理旅館・小槌屋の跡を継いで「さわたりや」を開店した。その後、第3代山形県知事・柴原和(柴原が着任した明治19年に、県令は県知事と改称された)から「千年の歳月が流れても栄え続けるように」との意味を込めて「千歳館」の名を授かった。政治家も多く訪れ、特に書家でもあった副島種臣は、掛け軸など多くの書を残している。

しかし、別の場所に移転した後の明治44年5月8日、当時の山形市北部の大半を焼き尽くした市北大火によって、県庁や市役所などとともに千歳館も全焼した。そして、大正4年、2代目澤渡吉兵衛が現在地に千歳

館を再建した。

なお、再建当時、周囲は一面桑畑だったことから、吉兵衛は番頭や中居、出入りの商人などに、それぞれ建物の近くに店を持たせ、にぎわいを図った。やがて、外部からも店を持つ者が流入してくるようになり、桑畑は一転、山形市随一の繁華街「花小路」となった(花小路の名は吉兵衛が命名)。

また、建物もユニークな造りで、西側は正面に車寄せを持つ洋風建築、東側は四季折々の木花を植えた中

当時のカフェレストラン入口。建物脇にあり、正面玄関を通らずとも直接入店できた(現在は未使用)



庭を持つ純和風建築となっている。それと合わせるように、吉兵衛は料亭の他に、一流コックを招いて建物の一部をカフェレストランにした。

現在の女将を務める澤渡好子さんは、「2代目(吉兵衛)はとにかくハイカラな人でした」と述懐する。

激動の時代と共に

大正時代から昭和初期にかけて、わが国では政党政治が盛んであった。とりわけ、2大政党である民政党と政友会の争争は日に日に激しさを増していった。千歳館は民政党の拠点として、しばしば会合が開かれていたが、それが俗にいう密談であったことは想像に難くない。

また、戦時中は一時休業を余儀なくされ、陸軍軍医学校として接收された。戦後も食堂をGHQに接收され、専用バーに使われたりしたため、本格的な営業再開は昭和23年まで待たねばならなかった。

その後、昭和60年と平成12年に大規模な改装を行ったが、建物の姿はそのままに、95年あまりの歴史を今に伝えている。



戦後、営業を再開した千歳館。GHQは県当局などとの、家族を交えたすき焼きパーティーを好んだという。資料：絵で見る千歳館百年史(千歳館)

ライトアップで地域貢献

外観のライトブルーが鮮やかな建物は、夜にはライトアップされ、一層幻想的な雰囲気を醸し出す。

普通の店では、営業が終わると電気を消してしまうところが多いが、千歳館は営業終了後も夜12時まで明かりを付けている。休業日も同様だ。

その理由について、澤渡さんはこう話す。「この明かりが消えたら、辺りは真っ暗になります。それで良いのでしょうか。私たちは地域に支えられて営業を続けています。その置かれている立場を考えた場合、確かに光熱費はかかりますが、せめて通りを明るくすることで地域貢献ができればと思います」

なお、地域のシンボリック的存在でもある千歳館は、多くの作品のロケ地に使われる。浅野ゆう子、山下真司など、ロケで千歳館を訪れた俳優は枚挙にいとまがない。一方、ロケで山形を訪れていた村川透監督(村山市出身)は千歳館とも親交があることから、昼食時に

「ボランティアだ!貸せ!」と言って、ロケ隊が弁当を食べるのに千歳館を「勝手に」(澤渡さん)使ったエピソードも残る。澤渡さんは、その時の様子を「主役の香取慎吾君が、待合室でおとなしくお弁当を食べていたのが印象的でした」と話す。

保存は容易ではない

千歳館は、平成14年に国の登録有形文化財に指定されたが、そこには澤渡さんの、建物を後世に残したいという、強い思いが込められている。「当時海外にいた息子が、帰国して(建物を)壊してしまっは大変だと思いました。登録有形文化財に指定されれば何かと規制が厳しくなりますので、壊されないように“先手”を打ったのです」と話す澤渡さんだが、心配に反して(?)現在は千歳館の保存・管理に専心する息子の姿に目を細める。

しかし、「保存、保存と口で言うのは簡単ですが、実際にはとても大変なことなのです」と澤渡さんは強調する。

事実、登録有形文化財制度は、若干の行政補助はあるものの、基本的には所有者の自助努力だ。千歳館も、トイレの改修やブロック塀の補修など、建物の維持費だけで年間数百万円かかるという。澤渡さんは、「そうした費用は、営業努力によって捻出するしかありません」と言い切る。

30年以上続く中庭でのビアガーデン(夏期)のような企画イベントや、慶事・弔事・宴会などへの臨機応変な対応といったサービスの充実はもちろんのこと、観光で訪れた団体ツアー客には、澤渡さん自ら建物の説明をして、「ぜひまた、別の機会に当館を訪れてください。そうでないと当館は持ちません」と冗談交じりにPRすることで、お客さまに建物の価値を知ってもらう努力も怠らない。

筆者はそこに、「建物を保存すること」の本質的な意味を垣間見た気がした。

(フィデア総合研究所 研究員・山口泰史)



急ぎでなければ、客はまず玄関すぐの待合室に通される。一見無駄な空間のようにも見えるが、澤渡さんは「場を楽しんでいただくことも料亭での過ごし方」と話す。(筆者撮影)